

トビウオ通信 (R1 第 10 号)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《令和元年度下半期浮魚中長期漁況予報》

令和元年 10 月末に長崎市で開催された東シナ海～日本海南西海域の対馬暖流域における主要浮魚類の長期漁況予報会議の内容をもとに、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚類の R1 年の下半期（11～3 月）の中・長期的な漁況を予測します。

山陰沖における漁況(来遊)予報〔令和元年度下半期(11～3 月)〕

マアジ:前年並みか前年をやや上回る

マサバ:前年並みか前年を下回る

マイワシ:前年を上回る

カタクチイワシ:前年並みか前年を下回る

ウルメイワシ:前年を下回る

※「前年」は平成 30 年度下半期、「平年」は過去 5 年間の平均値を示します。

マアジは前年並みか前年をやや上回る

東シナ海～日本海南西海域の漁況と今後 東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマアジの漁獲量は、増減を繰り返しながら 2～5 万トン程度で推移しています。H30 年の漁獲量は 2.6 万トンとなり、前年の 8 割でした(図 1)。H31 年 1～8 月の漁獲量は 1.6 万トンで平年同期を下回りました。

同海域における沖合域の今後(11～3 月)の漁況は、直近の漁況や調査船調査の結果などから前年並みと考えられます。一方、沿岸域における今後(11～3 月)の漁況は、前年・平年並みと予測されています。

山陰沖の漁況と今後 島根県の中型まき網によるマアジ漁獲量は H16 年以降 2～4 万トン程度で推移しています(図 1)。H31 年 1～10 月のマアジ漁獲量は 1.4 万トンで、前年同期・平年同期の 6 割に留まりました。月別の漁獲量は、1～3 千トンで概ね平年を下回りながら推移し、漁期のピークとなった 5 月は 2,790 トンでした(図 2)。

今後(11～3 月)の漁況は、漁獲の主体となる 0 歳(H31 年生まれ)・1 歳(H30 年生まれ)の来遊量によって決まります。毎年、島根県が他の研究機関と共同して行っているマアジ新規加入量調査※(マアジ 0 歳魚の山陰沖への来遊量の調査)の結果では、来遊量の多寡を示す加入量指数は前年とほぼ同様の値でした。一方、水産技術センターが定期的に調査している浜田漁港における 7～9 月の 0 歳魚の漁獲割合は 90%と過去 20 年間で最も多く、直近の漁獲状況を重視すると 0 歳魚(H31 年生まれ)の漁獲量は前年を上回ると予測します。1 歳魚(H30 年生まれ)は 2 歳魚(H29 年生まれ)と同等の資源量と考えられていることから、今後(11～3 月)の漁況は前年(5.7 千トン)並みか前年をやや上回ると予測します。

※マアジ新規加入量調査の詳細については「トビウオ通信 R1 年第 7 号」をご覧ください。

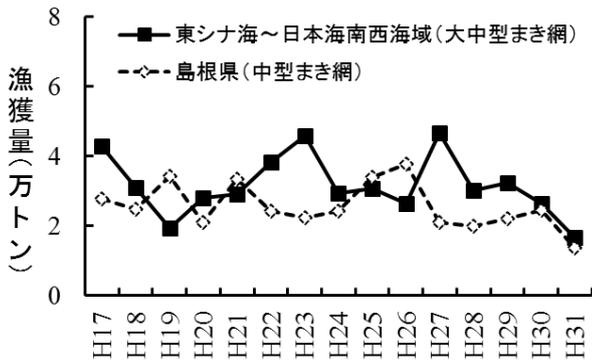


図1. 東シナ海～日本海南西海域(大中型まき網)および島根県(中型まき網)のマアジの漁獲動向
※H31年は8月までの集計値

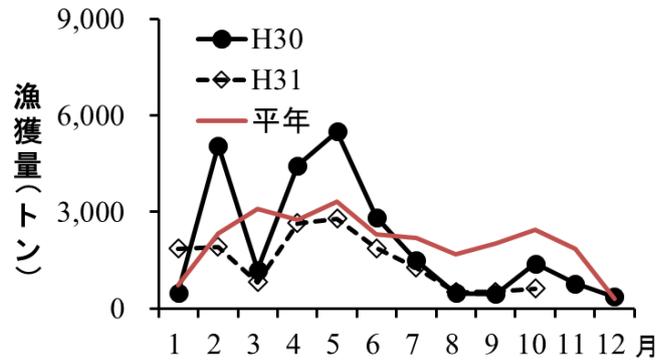


図2. 島根県の中型まき網によるマアジの月別漁獲動向

マサバは前年並みか前年を下回る

東シナ海～日本海南西海域の漁況と今後 東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、H19年以降増加傾向にありましたがH22年から増減を繰り返しています。H30年の漁獲量は4.9万トンとなり、前年の1.5倍でした(図3)。H31年1～8月の漁獲量は2.4万トンで僅かに平年同期を上回り推移しています。同海域における沖合域の今後(11～3月)の漁況は、前年を下回ると予測されています。一方、沿岸域における今後(11～3月)の漁況は、前年を下回り、平年並みと予測されています。

山陰沖の漁況と今後 島根県の中型まき網によるマサバの漁獲量は、1～2万トン程度で増減を繰り返して推移しています(図3)。H31年1～10月の漁獲量は約8,100トンで、前年同期の2割、平年同期の5割に留まりました(図4)。

今後(11～3月)の漁況は、漁獲の主体となる0歳(H31年生まれ)・1歳(H30年生まれ)の来遊量によって決まります。例年、10月以降が主漁期となり0歳魚主体の漁獲で1歳魚以上が混じります。0歳魚(H31年生まれ)・1歳魚(H30年生まれ)の資源量は少ないとされていることから、今後(11～3月)の漁況は前年(7.6千トン)並みか前年を下回ると予測します。

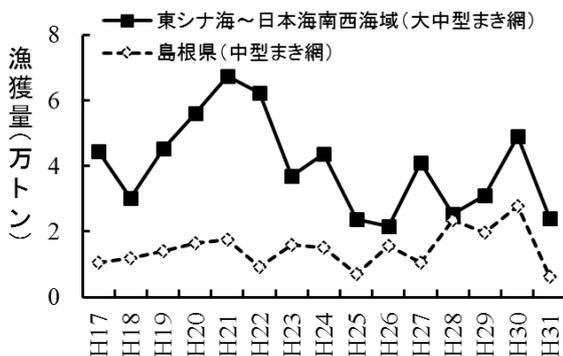


図3. 東シナ海～日本海南西海域(大中型まき網)および島根県(中型まき網)のマサバの漁獲動向
※H31年は8月までの集計値

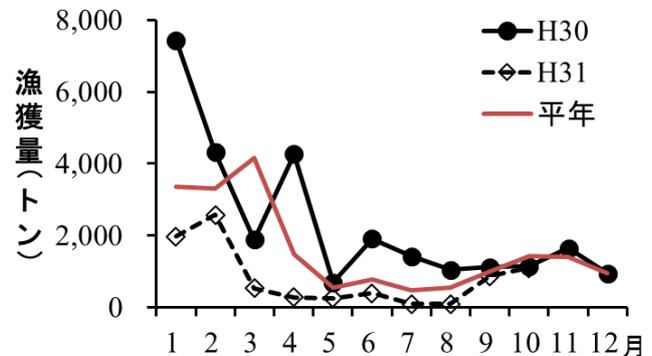


図4. 島根県の中型まき網によるマサバの月別漁獲動向

マイワシは前年を上回る

H31年の山口県～鹿児島県沿岸域における4～8月のマイワシの漁況は、62トンと前年同期の8割、平年同期の1割未満と大きく下回って推移しました。

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は、H22年まで極めて不調でしたが、H23年以降急増し、H26年を除いて2～4万トン程度で推移していました(図5)。しかし、前年のH30年は漁獲量が減少し、H31年1～10月までの漁獲量は2.4千トンで前年同期の2割、平年同期の1割未満でした(図6)。

今後(11～3月)の漁況は、0歳魚(H31年生まれ)・1歳魚以上(H30年以前生まれ)の来遊量によって決まります。近年の日本海での資源量、漁獲量は増加傾向にありますが来遊には海況の影響が大きいとされています。特に水温は低めの方が漁場形成に適しているとされますが、山陰沖の12月までの水温は平年並みと予測されています(2019年度第3回日本海漁海況予報 水産研究・教育機構)。水温は平年並みですが、日本海での資源量が多いことを重視して前年(356トン)を上回ると予測します。

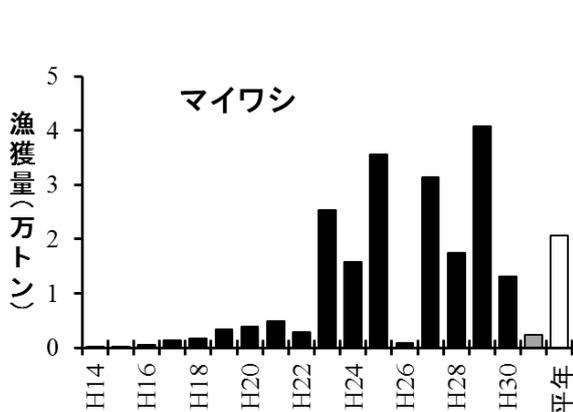


図5. 島根県中型まき網によるマイワシの漁獲動向
※H31年は10月までの集計値

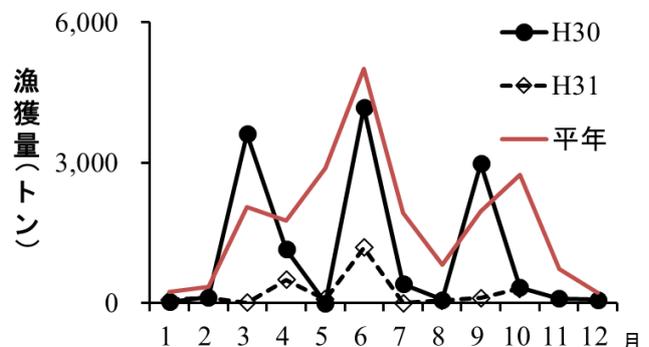


図6. 島根県中型まき網によるマイワシの月別漁獲動向

カタクチイワシは前年並みか前年を下回る

H31年の山口県～鹿児島県沿岸域における4～8月のカタクチイワシの漁況は、1万トンと前年同期、平年同期とほぼ同等の漁獲量でした。

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、H22年に1.5万トンの漁獲がありましたが、その後減少傾向にあります。H30年の漁獲量は56トンで極端な不漁となりましたが、H31年1～10月までの漁獲量は2,650トンで平年同期の6割まで回復しました(図7)。

今後の漁況(11～3月)は、0歳魚(H31年秋生まれ)・1歳魚(H31年春生まれ)の来遊量によって決まります。過去5年間の傾向で判断すると今後は3月が主漁期(図8)となり、0歳魚(H31年秋生まれ)が主体で1歳魚(H31年春生まれ)が混じります。山口県～鹿児島県におけるこれまでの漁況の経過から0歳魚(H31年秋生まれ)は前年と同等の資源量と推定され、1歳魚(H31年春生まれ)は前年を下回ると考えられます。以上より、今後(11～3月)の漁況は前年(48トン)並みか前年を下回ると予測します。

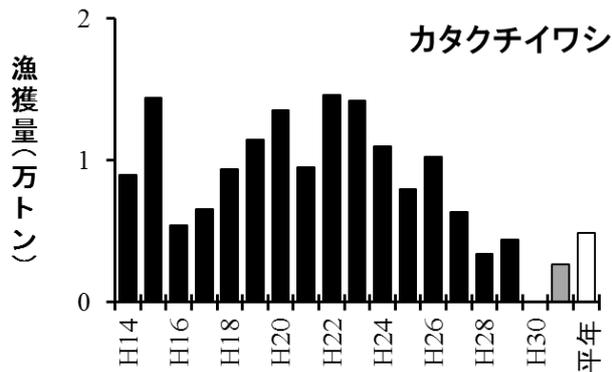


図7. 島根県中型まき網によるカタクチイワシの漁獲動向
※H31年は10月までの集計値

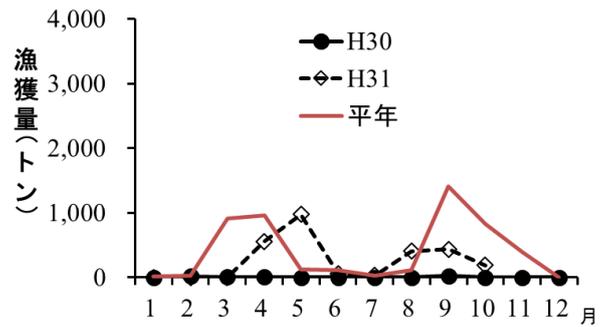


図8. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ月別漁獲動向

ウルメイワシは前年を下回る

H31年の山口県～鹿児島県沿岸域における4～8月のウルメイワシの漁況は、4.2千トンと前年同期の1.3倍、平年同期の7割の漁獲量でした。

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、H14～30年は豊漁であったH23年、25年を除いて概ね3～9千トンで推移しています。H31年1～10月までの漁獲量は1.4万トンで前年同期の2.6倍、平年同期4.9倍の豊漁となりました(図9)。

今後(11～3月)の漁況は、1歳魚(H30年生まれ)が主体となり0歳魚(H31年生まれ)・2歳魚(H29年生まれ)の来遊量によって決まります。山口県～鹿児島県におけるこれまでの漁況の経過から、0歳魚(H31年生まれ)と1歳魚(H30年生まれ)の資源量はそれぞれ前年を下回っており、H31年の春にまとまって漁獲されたのは2歳魚(H29年生まれ)と考えられます(図10)。以上より、今後(11～3月)の漁況は漁獲の主体である1歳魚の資源量が少ないことから前年(2.3千トン)を下回ると予測します。

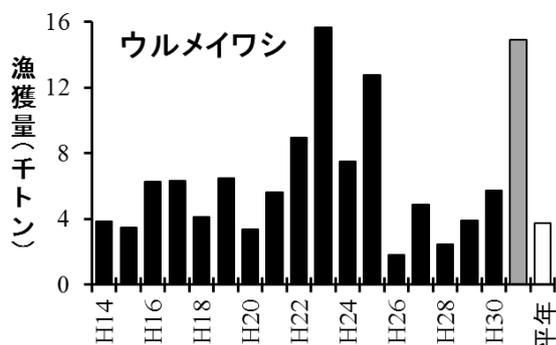


図9. 島根県中型まき網によるウルメイワシの漁獲動向
※H31年は10月までの集計値

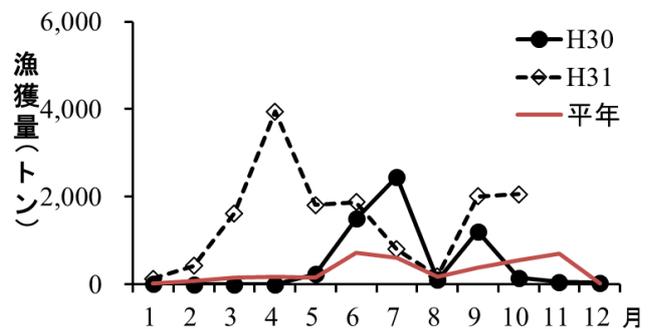


図10. 島根県中型まき網によるウルメイワシの月別漁獲動向